2017 年 3/11 日 「縮小社会研究会　第 5 回総会での発表要綱(要約)

「贈与」＝交換関係について　―社会展望としての意味―

青野豊一（人生二毛作　農業従事者）

「贈与＝交換」という交換関係が、縮小社会における社会経済の主導的駆動力とすることができるか否か？その意味と有効性を検討したい。私は今まで、このような理想理念を批判してきたが、・・・。

1　贈与経済への期待感に対する疑問

この研究会で繰り返し述べられている贈与経済への期待感に対する疑問を、社会展望としての位置づけをすることを通して行いたい。

この研究会では、未来の本格的縮小社会における①田舎生活や農的生活と②贈与経済への期待感が強く感じ取れる。

①については、以前はっきりと批判した。本格的な縮小社会において農的生活をすることには大きな意味がある。個人的生き方として、また社会構想として。でも、田舎には、強烈な毒がある。このことをきちんと意識して、提言しなくてはならない。単なるあこがれの次元で農村移住しても、毒に潰されることになる。今のままの施策では、田舎では何時までたっても近代的人間関係は形成されないであろう。社会的流動性が活性化されて多くの人たちが農村へと帰農しないと、そして強力な行政による政策がなされない限り、・・・。また、農業は天候に大きく左右されているので、簡単には収穫物は得られない。額に汗して働くことをしないと、・・・。

今回は②のことについて、しつこく書いた。詳しくは、HP に掲載されるのでお読みください。この贈与＝交換関係にも、大きなとんでもない毒がある。結論を先に言えば、贈与＝交換関係に夢を抱くのであれば、もっと徹底せよ!!!・・・と。

今回述べるようなことを考えたきっかけについては、これも HP に掲載しているが、夏の蒸し暑い農業労働の合間で、トルストイの『人は何によって生きるのか』を読んでいたことにより始まる。この書物には、私たちが社会の中で生きていく上でどうしなければならないかを、考えさせる働きがあった。

私たちは、物語として語りかけなくてはならない。

Ⅰとんでもない最悪の未来社会像と、

Ⅱ縮小社会となっても十分暮らしが成り立つことを、

Ⅲそして、その縮小社会が素晴らしい社会となりうる可能性を、

人は理屈では動かないのだ。物語性のある未来像が指し示されたとき、その言説の空間の中に自分が位置づけられた時、問題を自分のこととする。だから、多くの人たちに、この物語(夢)を提示しなくてはならない。理性的判断を強要しても、反発を誘発するだけのことが多いのだ。私たちは、「生身の身体を介在」させた語りを文章化しなくてはならない。

2　三つの交換形態について

現状の資本主義経済を批判するとき、市場経済まで否定してしまってはならない。資本制生産様式と言われているものは、巨大権力の専制国家が成立しなかったヨーロッパにおいて、近現代において国家行政による強力な支援で作り上げてきたものである。＊HP の 5 ページ参照

人間社会で今までに形成されてきた経済関係は、「市場での貨幣による商品交換関係」と「国家行政による収奪・再分配」と今回述べる「贈与＝交換関係、互酬経済形態」の三つであろう。

市場経済は必要なのであり、消え去ることはない。国家権力が否定しても、これは繰り返し復活するし、闇経済として生き残る。問題は、どの交換形態が社会での主導的であるかであろう。「市場での貨幣による商品交換関係」が主導的経済形態となっているのが、これによって社会が決定的に規定されているのが現代である。だから、まず、現代社会で主導的経済形態として機能している「市場での貨幣による商品交換関係」を相対化しなくてはならない。＊HP p5 参照

3　モースの『贈与論』について

●資料にある「全体的社会事象」と「全体的給付体系」を参照＊HP p9 以下

★このまとめは、山田広昭氏の見解(以下の①②③)を参考にしている。

①モースの協同組合論とその思想背景

＊資料(『共和国か宗教家か、それとも』白水社と、『マルセル・モースの世界』モース研究会編平凡社新書第 6 章交換所有生産『贈与論』と同時代の経済思想と、『フランス社会運動史』山川出版)からの抜粋)で 19 世紀末と 20 世紀初頭のフランス社会とモースの社会主義の説明

「ここには、私たちが自明としている所有論を相対化する視座が確実に含まれている。・・・。ところがモースが見出した贈与の体系において、商品交換を支える私的所有の前提はなりたたない。」

＊『マルセル・モースの世界』より

つまり、『贈与論』は市場交換以外の経済活動が存在していることを明らかにしたのであって、市場経済そのものを否定しているのではない。革命という手段ではなくして、フランス革命時に解体され否定された国家と個人の間にある中間団体(職業集団や協同組合等)を再組織化することによって社会改革を目指していた。これが、社会主義者ジョレスとモースの思想であろう。

②『贈与論』の中に書かれているアルカイックな社会における「全体的社会事象」には、お互いに矛盾したような複数のシステムが混在しているが、これはある意味で高度な社会システムである。

＊資料で「全体的社会事象」の説明

③信用という観念がこのようなシステムでもきちんと存在していることを指摘している。

「以上から分かるように、人類の中には、勤勉であり、たくさんの剰余物を作り出していながら、私たちに馴染みのあるものとは異なる形態のもとで、また異なる理由によって、多量の物品を交換する術を知っていた。そして、今でも知っている、人々がいるのだ。」＊モース『贈与論』 HP 参照

＊レヴィーストロースの批判については、HP 参照

4　パラレルな社会

アルカイックな社会は私たちとは全く異なっていると言えるが、そんなに遠くはない。このシステムは私たちのすぐ近くに、日々の生活の中に潜んでいるが、実は大きくズレているパラレルな世界である。このようなズレは、私たちの近くにもある。例えば、田舎の社会と都会生活者の間にある

ズレである。贈与＝交換関係に対する量的・質的な差異がある。田舎に住んでいる私と都市で生育した人たちとは、モノが贈与されたときに感じることが違っているようだ。私などは、何を返礼しようかとすぐ考えてしまうのだが、都市生活者たちはそうではないようだ。私の姉は言う。「都会の人は、何かをあげても、お礼の言葉もない。お礼の電話もない。何にも返してこない。あのような人と関係しても・・・。」家のリフォームをしていた大工は、言った。「都会の人と田舎の人は、全然違う。同じモノに接しても、・・・。」ここに、田舎暮らしにとっぷりと浸っている者の都市生活者への拒否反応が出ている。このように田舎の人と都市生活者とでは人の行き来はあっても、日々過ごしている世界(観)は大きく異なっている。田舎では、今も贈与と返礼の関係は都市生活者に比べて濃厚に存在している。この関係を通して自分の存在が他の人たちとの関係で成り立っていることを嫌でも感じる。モースの言うような「全体的人間」という熱い関係性ではないが、嫌な人とも無関係ではいられない状況で生活している。そのため、空気まで湿っている。欲と打算と無欲と善意の入り混じった重たい社会関係である。そして、これは、私の若いころのいくつかの可能性を押しつぶしてきたものである。しかし、現代の都市生活者の中には、このような関係性にあこがれる人たちがいる。理想社会として、贈与経済を思い抱く人たちがいる。「市場での貨幣による商品交換関係」によるパサパサとした空気の中で生活していると、・・・。だからと言って、贈与に伴う倫理性の復活を現代にそのまま求めても、大きな意味はない。

5　モース『贈与論』への疑問

❶彼は、贈与＝交換関係復活を夢を見た。しかし、アルカイックな社会での贈与＝交換は、生きていることのすべてであろう。ここに**認識の大きなズレ**がある。私たちは、今、砂粒のようにバラバラになっている感覚で生きている。ともすると、家族さえも・・・。砂も水分を含めば丸く固まることができる。人間社会におけるこの水とは何であろうか。モースの描いた贈与＝交換関係はべとべとしている糊である。そうなると、砂を一時的に固める水分の働きをしているのは、現代の人々を集めて関係性を形成しているのは市場における金銭による商品交換関係となる。しかし、部分的ではあるが、互酬関係も存在している。ここに、一つの可能性を見出し贈与＝交換関係へと希望を託する人たちが繰り返し出現するであろう。だが、「贈与経済」にあこがれても、それが社会全体を主導するようなシステムはなかなか実現しない。そしてその贈与＝交換関係の問題性をきちんと認識しなくてはならない。その上でこの夢を徹底して語らなくてはならない。

❷モースの意識は、実は覚めている。アルカイックな社会のように熱くない。「市場での貨幣による商品交換関係(2)」主導の社会に生きていて、贈与＝交換による逃れられない社会的拘束の中で生きているのではない。それなのに、彼はこのような関係性を**自らの意志で選択する人間像を想定して語っている。**ここに、モースの社会構想には、大きな問題がある。

❸このような社会で誕生する者は、生まれる以前からかなりの部分があらかじめ決定されていることになる。そして、これらをしかたなく演じるのではなく、きわめて能動的に社会参加をしている。社会の拘束性が自主性のごとく様子を示し、そのことによってこの社会秩序が再確認・再強化されているという関係性である。今の私たちから観て、このような贈与関係は、煩わしく危険なものであろう。先にも書いたが、モースの論は、現代社会との関係性がきちんと整理されていないのだ。夢と希望が混交している。このことについては、モースも気付いている。

6 モース『贈与論』の社会展望としての意味

しかし、だからこそ、モースの提起したことには意味がある。では、どう考えるのか。

現代において、これがよりよい経済活動として実現されるには、自らの自由意志として行われる時だけであろう。この意識が人間の内部に、心の内に、当然のこととして義務として思われるようになるには、どのような社会システムであろうか。主権国家の解体、新たな「中世社会」の到来か?

①贈与＝交換関係が大きく意味を持つ社会となるには、最初に示した三つの交換形態を組み合わせてうまくコントロールするというよりも、繰り返し社会の「構造改革」をすることがまず必要な事であろう。資本制経済を規制したり、国家行政の在り方を変えていくことで、この三者関係を変容させていくことが大切なことであろうと思う。私たちを取り巻く三つの交換形態が、今とは量的に、そして質的にも異なるモノへと変容しなくてはならないであろう。まず、収奪・再分配をする行政の在り方、そして、市場での貨幣による商品交換の在り方が変わらなくてはならない。そうなった時、贈与＝交換が大きな意味のあるものとなるであろう。そう、モースの言う「全体的社会事象」のように混然一体となって、・・・。

②そして、私たちがまずなすべきことは、国家的レベルではない狭い範囲の地域レベルで具体的改革を実践していくことである。でも、各地域にはそれなりの毒があり、一筋縄では事が運ばないことか予想される。そこで、まず、心通う友人・知人等の小さな協力的なグループで、・・・。このことは生活防衛としては、このような狭い範囲の関係性は意味があるであろう。今より濃いしっとりとした人間関係に嫌気がさしても、贈与されて負い目を感じても、市場経済も機能しているのだから、贈与＝交換関係のマイナス面を相殺できうると思われる。このような取り組みの中から、友人の友人、知人の知人へと個人的関係を越えた関係性を周囲の人たちに広げていける場の設定の工夫を焦らずに試行錯誤することが大切であると思われる。

③しかし、このようなことは、やはり一人ではできない。周囲の人々に、経済成長という夢から目覚めることを、事あるごとに、働きかけなくてはならない。そのためには、私たちは、もっと覚めなくてはならない。だとすれば、もう一度言いたい。人は理屈だけでは思考が喚起されないのだ。

●問題意識を自己物語として語らなくてはならない。論文では人の心には届かない。

●贈与＝交換関係の夢の旗をペン先から大きく広く高く掲げようではないか。ベーシック・インカムも、一つの夢なのだ。友愛の意識を涵養するものとして、それなりの意味がある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

モースの『贈与論』は第一次世界大戦という愚かな行為への深い反省に基づくものであり、ポランニーの著作は第二次世界大戦への反省であると言っている人がいたが、今後、経済成長という幻想を追い求めてエネルギーの奪い合いの果てに第三次世界大戦が起こるかもしれない。その時は、人類絶滅の危機をはらんだものとなるのは必定である。社会は、ますます煮詰まってきている。生活苦や痛みや苦しみを抱いている人たちが増えているのに政治が具体的解決策を提示できない時、人々を煽り立てて社会内のある少数派への攻撃をする政治家が登場する。このような歴史を、私たちはもうすでに経験しているはずなのに、・・・。同じことを、繰り返す歴史がある。

Jean・Jaures ジャン・ジョレスの言葉

「勇気とは、真実を求め、真実を語ること、いたるところで勝利を得ている欺瞞の掟に従わないこと、私たちの魂、私たちの唇、私たちの手で、愚かな喝采と狂信的叫び声を広めないことなのです。」